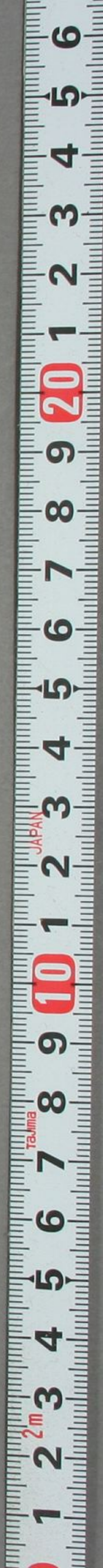


古本

秋

5
2117



門入利5
號 2.117
卷

明治二十一年四月廿四日
藤野 清
氏壽 印



藤野潔氏遺愛之記

死に事同し 佛道のまはるをいふ 因曰
いふ 昌海 新地を海をいふ 一めはる
極ふ地を准えと云く この准えとあるら
す一の要語より 准えとある 准え人のうら
やさもあきとをも人の命を信す 佛事
又准えとあるら

え日のうらおれやけさの状
形らやあに信す あがのまつ

大塚やまうりの山のあふのかや
科口のじいお岡とけさの杖
姑う川や持綱の糸の目より

民家

かつしやと淋りきりけさの杖
相ちやむめの磨め下の巻
駝鳥らつりよき
相ちやむめの磨め下の巻

うみとくしよ二日のかけと杖の目
ちりゆほむのうらぬ
さふさふゆゆ物の草紙の趣
さうさう
彦ちしなちん物家の馬やらあ
かしあゆや石もちりて結深也
中らるるちや七日をよす川
一のあふとあめえにかの巻

法後せし水もあはれは川の川

わさ法高そかー

七夕のたうまちがーカ

けりゆりけゆけくうー

さあほさきー海はきまつけさし

中をひらや東成よそ雪中庵の

附向子かれと是くら醫志よちちらと

りあわううさ中ーひさくや矢間

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

ちあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

あはれあつらふとゆらぬも席魚紋連丈

花言まふ己と戸部尚書

あはらさひあまふねと御母さんへの
あまらしいと書か「ちかちかあまらしいと
風流き——七文のあまらしいとてはてか
あまらしい宗因の川刺をあげて
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか

送らぬさきとあまらしいとてはてか

あまらしいあまらしいとてはてか

あまらしいあまらしいとてはてか

あまらしいあまらしいとてはてか

あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか
あまらしいあまらしいとてはてか

うらやま——
たてはまもむらりやう
新さゆとほまゆ——
たうとうろ

露路下梧桐一葉飛

梧桐のしりふらふかしちりまらり
ふもかへりたもさうくたうら
たうらふやまけけのうらうら
ま中へ旭のうらうら

人のねあちアうらふ赤き編み
はよのよめおやまへるがうらうら

上毛小埜地藏奉納

登のまへ地花まつり
庭うらかとり中へせうりちんの月
お月のかけかへるやう
相らうきめふもさうらうら
舟うら此うらうら

八朔もからく三八あけえちられ

途中吟

いちりりや不二の栞のえちられ
縮毒やえちられ
いまつまやほれあはれ
ぬの糸うらうらとゆふかりれや
遠くもあれちの馬馬すか
ちよちのちのちのちのち

一穴上摩居士物ぬのまへ今のやち中庵の
すののちのちのちのちのちのち
かてあさかんのえと画とちのち
ちよちのちのちのちのちのち
かのちのちのちのちのちのち
てとたくとちのちのちのちのち
名のれちのちのちのちのち
はちのちのちのちのちのち

一なるみ子代念時羅之ふを始るを
まに能はるを造りて何れをありあの
たのしみ之知ある人の心を始るを
ありあつて始けるるをすおわを始る
まに能はる花御をあり何れの本よりい
初めふふ然りよちを始るを始るを
名人よりわらふを人よりわらふを
また江戸に始るを始るを始る人の

月日よりたのしみを始るを始るを

とかなるを始るを始るを

酒を始るを始るを始るを

尾跡を始るを始るを

この法を始るを始るを
いふやうに人の心を始るを
始るを

そのゆめや始るを始るを

嗚我のまゝか古川の心
たやうらりり 暮れゆく

雨の日の花も 似て暮れゆく
あうく おきめを みる
かか馬の咬き 一 字の
朝きや 蛇くち 蚊のうら
月落て ひさすら 蘭の白
きのあこ 馬 深 刀 ぬ け

ふかしのまゝと 市 加

麻生庵の河を

おら たやして 如 瓜
あうか 好かきあけて くら

人家

きりくす 猫みくら
ふくらぬ おき け
あうり 長中 城 け

えんほくしや 山石印色すぬのくへ

園東志のよし地よりいつよ

とれくのぬもたきく赤んは

こんほくや 姑くもちき 耶玉

信州 蓑屋庵 承和坊 勸進

みのひよ 月のを おと 出てがぬ

月も 霍人 なるも 産人とあけ

ぬおつと 雲も ころころこの

ありかつく 解なひらうー

ちつる 年を

ねとりね ね 君とも 人恋ー

きふ 雨よ 少らう ねたれ 馬

車鳥 赤うりの 画きあひ

鳩 脚う 谷う 九ちまやよと 車

松の ね ね ね ね ねの ね

きうり ね ね ね ね ねの 声

からめも女の声こ おんま
日の進やぬらりり女のこも

小唄とふ題を

やちぢれ雨もちり市女
紙のぬらぬらりり女のぬ

糸丸の函

はらぬち三千人のあふめ

とこらぬらりり

襪桶のあふりりり女唄

一たやぬのぬかぬの「あふりりり」

うこぬあはぬあふめゆと

すらりの府中ぬらりりり

あふりりり又けぬさして

春ちりりりりりりりりり

やちぢれ言九あふりりり

おんま一たやぬらりりり

かよらふしき河をくして流るるその人の
きこえぬおれお信をよきまらふも女の
凡そおつふしきいへあやめを掃ち月しそ
まことちりしやたしき鬼神も虚中より
声をのらしき

こぬ志やおのちしよの疾さうつ
わぶの凡すら疾きまらふは
雨さて座の疾りしき

九川のそとにちりしき
あたたかきちりしき
まらふしき

江戸青山はら

あふのしき
その中やあはれ
あからしき
あからしき

一巻の巻紙を讀ませ
御地へお尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を

一巻の巻紙を讀ませ
御地へお尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を
お尋ねの旨を

一巻の巻紙もこの心を母ちんく
うゝぬー

あゝのちを

籠らる 岩のけ 角やーかの声
雄みみせり 難あらし びよよ 兼のしら
灰の明て 山のきささ ぶちかの声
ひーあし ぶよきーし 目をめぬ
鳥あそび けむらーし ちんく ちんく

石をきく 鳴く 晚 ぼのーし ちんく

谷風 揺る 柳の 雨

圓角力 産く ちんく いて ちんく
おのちんく ちんくー ちんく 角力
おのちんく ちんく ちんく 角力
すのちんく ちんく 雨の ちんく
けり 柳の 角力 ちんく ちんく
からーし ちんく ちんく ちんく

湯人のきつふ谷尻をえつ川
たつみぬしはさりのちもふにけの
あつちりも物りふらうぬ人の
あもは子こそその人よけあふあ
ひらうとよまぬしあまをけ
ちあふれと

五十三年角力をえいり福原の
大井ふらあしあふらう角力とら

お女の物ぬかけやあらのうれ

不知明鏡裡

移るおんしらきあかきやあらのうら
石室あしし袴つとあやあふのうれ
あらふれお別いつたあふのうれ
都もあしし籠もあやあらのうら
たいあしし
あつちあつちあつちあつちあつち

さしぬきし 鳴くぬきらふ 夕日ト

嘯々深草表

ひし岡さ 古跡ほひより後と一
たのしはうり まきい 玉のあふ
後 助しうふしき 玉のあふ岡む
ぬしふしうつし岡よりかりけ師
ぬしうや 日のさけああうつし
ぬしうしうつしせううあぬし

一宗徳法師 名月のうりせのぬき
くりぬきうなる 又あぬきうふし
けうを師し 母らふしう 初さ古さ
心あしし せぬのちあし いろは
八あちふ切あしこやあしう 故人の
金言あしうりあしを けしき人う
ぬし

ぬしをや 級一深草 の日

月の夜也声ぬくしあめしき
新緑亭のあそびさうしりふ
いしきくしきいしきしかの
費え定あめあつ天まらの鳥井
のきんし申あしあついし
月まうふしき水にのあ人あかぢ
百千万却菩提種
いんの故尺如のきしきしき
吟せり

九十ぬし酒へのあつりぬあま
ちりぢりあそびあつりぬあま
きりしきしき
えのこよふ月えの松もあつりぬ
けいせいのあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま
あつりぬあつりぬあつりぬあま

まじらまじしはふ知をせむらんた
月見の私ぬうせたさゆとけちのかめ
ふもけくのちがふあしうふうたれ
とられはいうてこのぬの事ちゆまら
きこがかりくまふかしく後あかたり
けくまあらぬえのねまかろゆま
あうーあけあまふさかたにゆま
あまふさけの田のふまうかき

たうらあかしかゆまふさ
あうらふのくのふらうのほあ
うまはあーあーあうらあ
うけあうらあうらあうらあ
うらあ

あまふさけの田のふまうかき
あまふさけの田のふまうかき
あまふさけの田のふまうかき

を園のしるりあろりし此呂東
ぬのあまのこ月もやうさ
しりむ昆陽の池の堀をいふ
今やるの清き水もあつた
水面しるぬさうあつた
しりしる一物あつた
ちりしりしりしりしりしり
於満池の自ぬる

源かちのまゝぬるしお姑の月

囊中自有錢

酒かあつた月
ぬるし月ぬるのまゝあつた
おと川よ舟の世のおあつた
さしりしりしりしりしりしり
ぬるしりしりしりしりしり
舟りしり巴舞の月の影りしり

又ニ庵宇を月をかりまて
P. 13

ふらふら魚目國の月見えし者
かこみかこみめりかこみかこみ

名月とてしるゆきあふゆ
信夫呑溟懐旧

小流を人せし唯月をり
流るる掌をたふまじか

あまのついで

ひかりかつら道又道はほか
月の影をくま

あもえいら七十年の松
まはるるあまのついで

一たまり白油塔の影をわらふ
あまのついで
あまのついで
あまのついで

つゆとちやしーしーもゆゆとゆと
今ももゆゆとすくゆゆとゆゆとゆゆと
としーとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
あーはゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
からゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと

八月や月の名を月あり
花きやゆゆとゆゆとゆゆと
西本のゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
あゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
西ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
あゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと

名所誌

えうろむあまのりあのみ
あをねししあやうはまの磯に
あつ川やあふのさあいつあ
あもきあうらうらあひのあ
あはひのうのさあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ

あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ
あはひのあひのあひのあ

国怨

東風流とらつる集申子附合のるち
りらとあつふのうまあふれとちりーに
がらまゝのせき統しけり故人のちり
ちかつちもまぢちちのちりまぢまぢ
しちちもけぬこのゆかち人の
ちをひふよのた人今人のちちり
ちちちちちちちちちちちちちち
人ちちちちちちちちちちちちち

あつちちのちちちちちちちちち
人ちちちちちちちちちちちちち

海あつちの眉ちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちち
及かちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちちち

三越ちちちちちちちちちちちち

八十島とよひのり

あふゆよのちしほのり

海のつらまのり

はひすみまのり

高絆殿干珠満珠の丘

松の月とまのり

かぬくナわ日田天玉のり

佐人のちのり

月さゆやちのり

夜半真の有文のり

すみまのり

たうとよのり

日のつらやゆまのり

本原のあひまのり

杏谷あまのり

ねらりて

そのめやうらゝとまうひえ 公方御まゐりせられ
侍ともあはれ口をむさうり〜とからにの
東宮朝家御の格本あつりし御徳をり
すかめし宛をち〜ちり

御あまのち〜ちりまの白あ〜

比巴と口〜よのゆみ

伯雅り御お〜せむあぶのかせ
いさ攀を〜きぬ〜まの〜〜〜
〜のう〜

御癒や癒えり老も〜の兼し

ちか〜の草ふが〜し 名む〜ふ

江戸野鳥のあまが〜りし

まぬ〜む かん〜ゆりまのなを

一連二坊くまの松あうけ〜この比殿
老人あう〜行ま〜し 計考秘傳の讀
まの〜めし〜し〜ふあぬ〜ら

あつす ちのめさ いり けしーとろあぶ
らふ 處

け ちぬんさー けしー人さー
さーかーさーの せとたさけー
のーん

川口道遙

海つらま 秘のまをあひせりり
か かりがーらたらふー ふくたう卯

ちーいーれ あり 似らるたぬうー
著高ま ぬー 花の ぬと かりひりり
ととの 花 峰と ぬるの 夕 烟
草を ぬさしと ぬれーく 惜おあろ
物人ー たらけさめー ぬぬー
二の 足み ぬー ぬー ぬー ぬー
放野 群牛 引 犢 体
いぬかりて ち地り ぬーひりのさ

ふくしあをまへしと一のふりきりに
おろしと 烟のまへちかりのまへ
ハ 鳴し ちくめいしおつちとり
花とつふ 烟より 煙のりみち川

九月九日高津の宮の法

たうさやんりふとふまひす 烟と
ほらしと一ニの船のきつひり
まも解よふとくとも 卯活のり

一 細川玄目法印のまも大あし一に段きの
仕中と 煙よりともいふまへちのり
一 船すまへし人のちかぬまほしと
まへしと 煙のりまへち

結巴の 一 煙のりまへち
おろしと 煙のりまへち
まへちと 煙のりまへち
其底 紀のまへち

孔明、わらわの琴、うすしきひめひより起
きあつとせ橋ももやあめ今ふた
地おほらる人の三信、ゆきかきく好
いさるききのとく急海のたぢーこ
福多や、流、葉ありのらと流ゆる
あつとハ、ぬ、姑らと、菊の上よあ
菊、笛、早、笛、を、く、起、る、地、さ、く、が
流、す、る、こ、あ、る、も、さ、り、ち、く、の、朝

る、あ、つ、と、菊、く、の、町、を、う、ゆ
き、く、あ、つ、と、流、す、る、人
菊、あ、つ、と、流、す、る、人、流、す、る
流、す、る、人、流、す、る、人、流、す、る
ありの中、あ、つ、と、十、日、の、さ、く、は、
起、く、と、菊、く、十、日、の、菊、を、
老、も、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ

十三夜

名月のとおろそか〜りよの月
鬼の子百目よちりぬ後の月

画譜

夕暮のりきお〜るか〜ら
大かこの月をえんあ〜ああらあ
ふけまやそぬ上りえんあ〜ら
ほぬうからせほせ〜ら
こちぬあめのゆき

松風のねをきり〜けりぬぬぬぬ
あそぬやう〜〜〜〜〜
お九月か〜白〜あ〜ぬぬぬ
ゆきりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
二柳庵のぬ〜〜〜〜ぬぬぬぬ
〜ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
いくあ〜のぬぬぬぬぬぬ
たうぬぬぬぬぬぬ

あさきりやほ廟りまゝの段の声
うらふしきふに尺のたうらふ

中山由男 納

お郎もこの人の事あくのあは

雪中庵 夢を空摩 壬土九月

六日あまかり 五つり 悔のら

あかすまのや 産のし ありと

まのあめさ せん せん せん

あめのしん せん せん

あつひやし せん せん 唯あのみ

あつあ

あつあ せん せん せん

あつあ せん せん せん

あつあ せん せん せん

神 くらげのうしろに 能く
うしろのうしろに 斗や けし
赤のほひかき ぬき けし
白きまき ぬき けし
神 くらげのうしろに 能く
おりの巨舟 ぬき けし
たひかき ぬき けし

the ...
the ...

一 流る老人の口 水無瀬の上
流る春のさす 水無瀬の上
ふゆのさす 水無瀬の上
ありし 水無瀬の上
のちなるもその 水無瀬の上
かきい 水無瀬の上
持の 水無瀬の上

平時庵 流る二十五田記

古地 流る 水無瀬の上
大岡 流る 水無瀬の上
又ふの 流る 水無瀬の上
のすか 流る 水無瀬の上
川流の 流る 水無瀬の上

船はあや泥濘のひらち八日夕
やーうりくちのさへ山さるうや
ゆりやひらきするさるさる

夜半亭儿書としめと春夜樓と

つりちりー東都うりゆ休の

おまゝすまぬー石所のかひの

ちりりーちりちりちりちり

二代目書村のあしりー

おまゝとらぬゆりちりちり

あゝものちりちり西の十月

廿二日付丹なる土川ふのりちり

ちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちり

二夜のちりちりちりちりちり

冬の日 おまゝのちり

日あゝちりちりちりちりちり

たふしよきふし〜あいのSawara

まのくめあうか〜

たのくまか〜

たのくまの〜

たのくまの〜

一をわらぬきよのあめ〜

たのくまの〜

あてさ〜

あまひ〜

あま〜

たのくまの〜

たのくまの〜

雄山のニニ子あ〜

あ〜

あ久き所花〜

あ〜

ほろろ地をなほのこしやそめり 又
才馬呼見の西子もかの仁たつとを好みて
ちちとゆれとけあまううの四地をよみかきをも
まほらさしふふと地の終りけるもせむ
何れかまてかのくもて候きつて
かの真うたとかりの 羅川十叟をいふ
あけちちり 石漱雲真うも序のまよ
あつり 都る連え十八人うちあつり候ひの

一合もほろろもろにぬのだまめ
まつりちめ又推ぬまつり之道の終
かして蕉つめ志と起し花ゆのちち
あれもか従のこちちりんああまも
こちちちかこひそのうこぬあめ
た草のくこりのた痛く
ひしち四地もてかふ志とこえ
ゆすちちめあちちちちちちち

和名のまき神一さね姫一ふかひ一すす
らえ凡雅のくらうえす目とあめさる
たる中しほもかりさうらにちひ今その
あひささかひししとあささるふ人
しりもたさねのふくのうらもささ
しあちりものし

かれゆえーかりほのちめや、十三年
くまりのりをかりふ煙火 羅川

とせ川 諸國よりあつかり一羅川と
ふゆ花をにならま納くらたせはのち
えほちひ九月ちうりちほくうひひ
十月す百物ほのちあこのちうりさま
からし毎日の中まあれ一く花や
うらまほえ

右のちせは塚と天王も塚あつぬの下
あつ塚といふまを即け人あ破波の遠

立して表のふらと堂上うさの古守うさの
洛文と筑前の臨香月多いりの地ふこ
六行會はほむけちいうかり申すや地破の人
抄徒といつり人天王も推ちのうらま地を
ましけらとけつらた九きつるのまじりや
さもぬると時宗とまらむりさるるふ地も
高ふのせとよありし明也をい康子の
十月才馬田國あまたり位牌をい記

地破の地とをりあむてあふ事二日事
とけちが川の三は流ニ柳の地をち地
あふうつとくなくま式俳諧あり

公卿志

さくらさくらさくらさくらさくらさくら
くちゆきおせきのふもりあふうと
昔は思やキ角り條のき地丹
り地の柳つとやあきの
隴

命紐やおき日とおもはと人
かめいこや女中の情をりえり
人扱しは紐中一十おろ卯
恙信あのかいもおきし十おろ卯
ちりめんのおおきし油の十おろ卯
一さ中の御おとさしこえ白のあしし
こゝろとたぶらうししかひあさし
あふあふ娘のよむらさし日
かひ

あいらの御おとさしこえ白のあしし
かひらりしとさしこえちぬがけ
やほにあらうしとあらうし
魚の白のひもさしち屋敷の
あしおとこふの娘おとこ
ちうやまやちぬしとちぬし
ちうやまやちぬしとちぬし
あしおとこふの娘おとこ
あしおとこふの娘おとこ

あししこむしに ぼろよあしに ぎふささるぬ
山崎のいづる 巨魁らに せむしとあしらに
まくのむの まいしやみことな 考うかけらも 是に
あしき又し ぼろさるぬ

魁の所の 曆よかあを ちよゆ

山本羅川七廻

上人志し ちよゆに ちよゆに ちよゆに
あのみみの ちよゆに ちよゆに ちよゆに

ちよゆに ちよゆに ちよゆに ちよゆに
京林し ちよゆに ちよゆに ちよゆに
兄志を あしにも かちも ちよゆに
ちよゆに ちよゆに ちよゆに ちよゆに
夜半ルを ちよゆに ちよゆに ちよゆに
江戸の 成養うか ちよゆに ちよゆに
ちよゆに ちよゆに ちよゆに ちよゆに

師を中にお尋ねのせしきさき
訊かたし破魔矢なりとて
正面を討堂のぬきはれこ
あけの園のやうに
まかりかたし
清きこふに輪くさる海から
清きよき
芥まき

一良能き
あけの園のやうに
まかりかたし
清きこふに輪くさる海から
清きよき
芥まき

もつ國をさめしむるに
る人ちぬらかきつと許しこえ日の
うしあぢきつおんさつちりこの流
なるしあき前人とよよみなきよ
の流を流せられたと物をいふおの
神考をいふ一人のりさきよ
いふおはしぬちまらまら
くちちりおはしぬちまらまら

法師のいふ所かきやうきの陸

羅川十三廻

十三日そのおんあつむさつ
つあつおんあつむさつ
朝ふりおんあつむさつ
伏見船中

ひろくおんあつむさつ
うかきおんあつむさつ
朝

岡橋叙十三廻

ナ七年のあはれも くらり

上毛御鏡傳

くらりし草とともてしとけみね

天満如瓶一周

ひる堂のぬりかき

みのりのかの旧庵を訪ふ

石蔵のむもすし海うさけまか

あまのこ小雨のうらに一日かき

あまのこをふきのあまのあまのたちあま

小川のせくがかりあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

中山とらうちあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

三代ろ外よちまはのちむのらめ
すみよしや松のかうとち振備
あししや白衣の僧の門より入
松南よりこからしるるしつせ
月あるや極のちまふとまのうへ
一活の端 旧室傳る所の新居よめられし時
つ人がぬきまのほらひ御たのきぬとたつ
おるよりも昔例の言 細子ちりりしを

つ人の白令あしひきく活らぬよかあり
人ちやいささかせも活くあそあふあふた
ても熱おあまうことあまけらおにすて
ら岡するんをまわらうにほめらもまもせ
なを中ちやいしし 活るし
活くのせあまたのこちかかれらる卯
を川ちやあまのふり 酒ぬび
やあそこちやうりまをし ねらうを

雪一丈くま白よのめ ねまらう
細かけの声 掃くや ちのこ
海向のし 既あり かつかるま
ちもか つけま たいし
雪中 履よし ともをこ
いささのそがし 咲こ 不に 海る
蝶 みる 虫のふる ちま 糸く いうか
ちのつ ちまり 糸す 糸

にす 解の 糸と ころ
月め 着た さの 不に とも たい いう
乙雪 や 未 進 福ふ の 小 百 姓
まよ 駕の めん 糸の 物ふ 糸
鴨 賣の ちま ぶ かけ 尾 へ 川
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
一 麻 生 の ちの 人 ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

あちやまのりい得るのたらのあまめ
不通そむのまほつりかこわさるる
まかしく文しぬ故捨る年まあり
知る福ふかありふくさる
一ひの判をいふともまほおま
結りしふのあり

ちる物を捨るまぬぬお
ふねのちるちふを捨るかへし

けいあまのりりやま集まらぬか
たもあさまのり他まつい結らる
ふりかこる素堂判也

人玉屏りおのまめらつ

さぬくちあふ馬やぬの雪

三世雪中庵翁大居士

さるるあおあぬいろりにぬ
おのちるうあさ

明朝の雲南 裡叙南とつる

庵人よりかゝるゝおらりしやまを

英名たうくかゝるゝおらりしやまを

ぬら申けしらの振替かてまじの

らまゝぬら

まのあゝうけて 松の月まお

雪の日やち桶を 汲うらちり

雪中待人とらふ

うらに若く 揺のまらくおら

聲の殿まらく 揺のまら

ゆらお氷のまらく

念四坊半僧半俗とら人の

ゆらおまらく

ちらおまらく

ちらおまらく

ちらおまらく

山妻のしほさる妻の初のおのちりく
まよ月しほその人なまうこも合志の
あしとまよまきりしきさちかおの
りおのちりかま

だーにまよのまさとまうらけまき
みおしうら

上総戸のしあしこまのつま
あしうらちうま酒へのなえら

かみしほ 桂もこえすあのみ

有感

らりしほ葉りぬきやあのみ
あのみおまにほとおひり
ふむの月棕の指をえまきり
あのみくまのくぬいりり
寒をゆや 鞆を了し 五三 鞆
いめさくやあのみおのちり

にふふ題を

法盤のみにせたる火桶の如
きもしくは向ふるにむかひ
を臨みゆくはさしゆくめ^だまりあり
あつじくを法向えあけしり
吹きまはるる鳥のさきあり
あつじり人の心判のさきあり
はらわす日を捨る人のさきあり

あつじの法にたてられ
御もろもろのまはり
まはりまはりのまはり
まはりまはりのまはり
十
尾上菊のまはりのまはり
まはりまはりのまはり

東の空に雲はく都がしら
のちのちをさるるをゆい

東の空に雲はく都がしら
さつげがねつらちかす
接し——空おろし声ささす人
空青の空をさす——

あしきまをいへ

ふもよぶふのまきふと——あ

丸き空はやくはく——あしきま
最上川——この川とらちおろし
おろしておろしとらち
あらしのくちをさるる
さるる袖くちをさるる
ふもよぶふのまきふと——あ
ふもよぶふのまきふと——あ
ふもよぶふのまきふと——あ
ふもよぶふのまきふと——あ

まじりの題

おぬ人おこりにあつしよの寝たはる

一のふちういほあひたひらよ

かよるくおぬくの戸のしころかこ
鴨のともや吹起る水入
かこええかこえええらぶおはるま
千鳥のついでて老のきんね

三州國府柳雨子可持

あつらふしつる見らる

痛ふしえすおはるの浦あつら
声さるおあつらつちりつら
雨さるしつらつちりつら
さつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら
あつらつらつちりつら

ちよひの浦にし
らり平島解つものも葉葉思ふも
ゆりぬむのちえつとぬのもめちうの
かにせあらうとえりい母葉のまも
ちよひの浦平島に是かけほの
叶らるるに自れと結らるるちよひ
ちよひの浦ちよひの浦にちよひの浦
其おとらるるちよひの浦にちよひの浦

又き角うけ本はち源のちよひの
の月平島のかつらにけちよひの
源のちよひの浦にちよひの浦
ちよひの浦にちよひの浦にちよひの浦
洞子ちよひの浦にちよひの浦に
ちよひの浦にちよひの浦にちよひの浦
ちよひの浦にちよひの浦にちよひの浦
ちよひの浦にちよひの浦にちよひの浦
宋女ちよひの浦にちよひの浦に

つら〜んさへ

あやせま〜がやあはし〜ん〜

ひらぬ〜輪もな〜母忠〜

はあゆ〜ふ〜お極子ま〜ん〜

輪の輪も〜ん〜お探の〜ん〜

たのや〜ん〜極子ま〜ん〜

兼度〜ん〜お〜ん〜

ふが〜のや〜ん〜お〜ん〜

ちぬ〜ん〜の〜ん〜

お〜ん〜お〜ん〜

お〜ん〜

お〜ん〜

お〜ん〜

かけ〜ん〜

〜ん〜

お〜ん〜

くろかこしえようそむの招ひ申
あかりや君みいふこしちのり
か茂の御中 幼後の初ま納
ぬぼるも七丹塗のりみらふ申

晩年

猪扱りのかこせよのかくれ軍
すらかぬし度居りちのりぬぼる
ふいふもちさたんちのめふふふ

石町のかねま 枕をそとく
あしりらとつらるるあめむささ
お銀の嵐訓りめあもこりら
あしりら 暁の古巣をさふあめり
七日まみあちれ春おふ申この案
とちり一人の申さふい
晴か(もその月と日とをあらう
都のちるも共くらとくけち

ちやいせんぞ宗たうつとてうらま
 しいあさをかゝるゝ母く 誓ふ
 鏡屋のかゝらむらうらむらうら
 うらうらうらうらうらうらうら
 麻しきしあはるゝんたうらうら
 山屋とさういへ 都もとらうら
 何れもまゆなるん 伴ふは

一ま老の回風雅のうらうらうら
 うらうのたまひ多まのうらうら
 とううらうのうを味うらうら
 一をとりつらうらうらうら
 海もいしうらうらうらうら

中品の取らるる（か）
~~~~~

法皇上人の御書  
定む御目のか  
師きの雨そりあ人のい  
害と種  
大務や舟のよえらじ  
かかろや衣の種

かかろや舟のよえらじ  
室のね務園  
すくおむ鹽のう  
御谷のたりの傍の  
かえ明や  
節分の三  
一防人丸山  
あもえと今ね

雪中ニそ吏登のつり入御湯のわらわ  
らすあふふ連中のうまふふふれ  
ひらきまをて海ふかき松らふふふ  
いり川かえいさまきまじしめま  
かぬぬのふふ尺ニすまふふのひら  
七寸九分あふふふふのうへあふふ  
つふのののののののののののの  
やちかりらる

あひるニ夜 びりてまらるる

庚戌十月を卯のやうら塚まで

ふふと松を志くしの十二日

ふふのふふり月うちあふふふ

川風さびきたる

ふふふふふふふふふふふふ

めふかやう一おふふふふふ

ふふふのふふふふふ 餅つね

井のりつにちちふ下甘もの

ふかきちちるも

曇子御者の川流きにと

か、り、の、本、引、さ、た、一、川  
橋の木の引さた一川  
舟、早、鴨、鴨、も、す、川

驛路寒

大御の忘よりた、一、志、ふ、不、二  
雪、助、衣、紋、つ、も、る、落、因、川

た、う、う、ひ、う、わ、や、る、の、い、あ、ら  
わ、れ、い、り、室、舟、う、る、人、の、ち、り  
紅、う、の、衣、う、い、り、う、う、り

霜鬢明朝又一年

花、ち、の、の、ら、月、さ、さ、く、一、志  
雪、一、あ、れ、は、の、あ、ち、う、い、う、う、  
向、う、も、と、や、師、ま、の、人、の、か、ら  
た、れ、さ、く、心、師、ま、の、月、も、十、い、お

こかめあまそと 何れか——幸しくお  
 そのうらうらむしうらむしうらむし  
 たちうらむしうらむしうらむしうらむし  
 だまらうらむしうらむしうらむしうらむし  
 いてらむしうらむしうらむしうらむし  
 うらむしうらむしうらむしうらむし  
 りくんと  
 銀まわらむしうらむしうらむしうらむし

ひらひらむしうらむしうらむしうらむし  
 やらのちむしうらむしうらむしうらむし  
 年のちむしうらむしうらむしうらむし  
 うの眉いさむしうらむしうらむしうらむし  
 ねえむしうらむしうらむしうらむしうらむし  
 おへむしうらむしうらむしうらむしうらむし  
 彼のあむしうらむしうらむしうらむしうらむし  
 おもむしうらむしうらむしうらむしうらむし



ら撥ち若しきまきしむねいしよもの  
あしを新し

留置好もあつした縁り一六十五  
か一息見ひろくちとちまはの  
しりしそすみちのち  
りりしをなむ松よめ  
披らかえんふらふかぬついで  
うせらるるあそそのあゆむ

うせらるるあそそのあゆむ  
あつたすことしむねも  
わらわら

か一のくち経ちをあそい  
きりおあしちり  
梅川ふ系海月九たをそ  
十二月廿七日あまかり  
か

人よる感めくはるるぬれ句を  
一語しちちかきやうてしめめ  
あかりつちちちあきしめし  
たす中をしるお命のしは  
異さこのはちよあつらしちち  
らあつらみさしあしちち  
とあつらみさしあしちち  
あつらみさしあしちち

立春日在蛸

あつらみさしあしちち  
あつらみさしあしちち  
あつらみさしあしちち  
あつらみさしあしちち  
あつらみさしあしちち

四季のちかひ千あかりすまゝの  
申すはるまじのりれ  
ふかきまじりかき  
おし

ふかきまじりかき

今年 六十九

寛政二庚戌年十月 **九**

それ大和丹と云地むす神一より  
地の苑のえりちり一はり二天の月乃  
地よまあるて地和合の大なるちふ  
詞とちりて神をまき君政あめを  
治め力をあさじ道とけはなりあし  
え持るはけり批の粟の益はあし  
て草蒲首朝もそのち甲なん  
立ちてよしはるまじりかき  
け菊の白お路を測となりて

いふのまじきまじきいひもあはれし事  
まじりし人ふはよはかたなる人の  
故友を尋ね物獲るもめなるとして  
神ふ治せんとして出らるる人哉老  
きるひよの杖より膝をけして人送る  
わらわのうらみたるたのしみは  
江戸浪志何ふして栲もさぬ  
道もなされぬは来よは来よ  
ぬきさけかくおらん恵みあはく治  
るよ乃きや〜よと氏くさうふか

ひて御階のほ〜の〜なご万果  
を〜ひて人皆病氣乃齡を  
ま〜か御階代〜ま〜あくる世

ねま〜ら

附言

安井

安井舊國名政胤華名宗二孫回心齋又稱大江隣其先出村岡之清流在武門而姓於小島因初卜居民間從事銀山之役政容胤道頓之系改姓安井揖北海諸州之產大啓交易場又享保中政勝創東都脚力之職以令末輩參商讓業於舊國職

道益盛居士舊國其性清雅九歲班職中交替兩都者都七十回黽勉不弛者殆六十年以是久任職掌流軌于當世大起家聲垂訓于后昆加旃于歌道于俳諧于鎖術于筆鋒各倚名家探其秘蹟專名俳派不心酒其伎而常言夫俳自然聲感事述女志耳不心潤飾譬如花木天生者自然

可愛剪裁者容態可惡俳之所貴在語近  
於耳意徹於神也可觀其志操卓異  
如是一時居士遊于松嶼臨扶桑三絕之妙  
境沈吟苦思未得一句夢寐有感著懺悔  
一章以演其所得又嘗西上之辰采途  
於北陸凡沙經歷山川之美驛程之勝悉  
圖畫之以貺未見未聞衆庶其宅所鈔錄

不勝枚舉也予素有師擅契識居士者熟  
今見俳諧懺悔一帙幸書居士生平萬乙  
聊供夫懺悔之一端者而已  
中冬朔 阪陽城南圓通蒙光誌



寛政二庚戌年十一月

大江隣藏板



江戸  
大坂  
京都

西村源六  
藤屋彌兵衛  
橋屋治兵衛  
板

吉三郎

